

異文化理解教材ムラカミ

—モーリシャスで読む短編『蛍』—

小池理恵

MURAKAMI: A Cross - Cultural Reading Text
— A Reading of “Firefly” in Mauritius —

Rie KOIKE

2017年9月8日受理

Abstract

This is a trial research, which may also be used for understanding how the university students in Mauritius read and observe stories by Haruki MURAKAMI as a global writer. Murakami has been translated into many languages and read widely in the world, and he is one of the most popular writers in Japan. In his interview, he has shared his standing point as the followings: I would like to write about Japan and pursue the Japanese identity. We Japanese often ask “do you like Murakami or not? I would like to ask the university students in Mauritius the same question after reading a short story, *Firefly*.

キーワード：異文化理解、グローバル化、村上春樹、Mauritius, *Firefly*

序

本稿は、筆者の恩師である故三浦玲一氏¹の最後の著書いわば遺作となるが、『村上春樹とポストモダン・ジャパングローバル化の文化と文学』に着想を得た。加えて、ノーベル文学賞候補に何度も名前を挙げられてきた村上春樹が、ここ数年筆者がフィールドとしているモーリシャスではどのように受け入れられ解釈されるのか、あ

¹ 三浦玲一氏は、その研究人生において、ドナルド・バーセルミからウォルター・ベン・マイケルズの研究に至るまで広範囲に多角的に論じてきた。その遺作は「グローバル・ポップ・カルチャー」について新自由主義化のプロセスを明確化する試みである。2013年天逝するまで、筆者の博士論文（名古屋大学）指導から始まり、モーリシャス・クレオールに関する研究をクレオール研究の世界的権威である恒川邦夫氏に繋いで下さり、国際シンポジウムの開催・講師招聘指導に至るまで多くを教示くださった。

るいはすでにされているのか、という好奇心に端を発している。

2017年文科省は、教職課程（英語）の講義において「異文化理解」をキーワードとし、その目標として「社会や世界との関わりの中で、他者とのコミュニケーションを行う力を育成する観点から、外国語やその背景にある文化の多様性及び異文化コミュニケーションの現状と課題について学ぶ」ことを挙げている²。本稿は、グローバル作家として世界中にその読者を持ち、多くの言語に翻訳され注目されている村上春樹の作品を異文化コミュニケーション教材として、異文化の中で読む試みでもある。最終的には、日本の大学生の読みと比較することにより、読み手の逆方向の異文化体験が可能になると考える。

文学作品は、その作家の母国での評判以上に、思わぬ国の思わぬ読者に予想を越えた大きな影響を及ぼすばかりか、文化現象にもなり、別の作家の傑作を生み出すきっかけとなることがある。村上の場合はどうだろうか。確かに日本にも熱狂的なファンがいるが、国際的評価が高いという点で特にノーベル賞に近いといわれてきた。『アメリカ文学に触発された日本の小説』の中では次のように述べられている。

もし村上春樹の作品が国際的に認められているとしたら、そこに日本的な特徴、あるいはアメリカ文学の影響が確認できるからではなく、それが国籍を超えた人間の永遠の問題を扱っているから。アメリカをはじめ、現代の海外の作家たちが取り組まざるをえない問題に村上も取り組んでいるというべきでしょう。（渡辺利雄）

村上春樹の作品は実に約45カ国で翻訳されている（後述翻訳地図参照）。今回の実験的調査は、三浦氏の問いでもある、日本と翻訳された国の「どちらが村上をより正確に評価しているといえるのであろうか」（10）をスタート地点とする。

村上＝ムラカミ³はグローバル文学者と定義できるのだろうか、なぜムラカミの描く世界はグローバルなものといえるのか、という問いに三浦氏は、『村上春樹とポストモダン・ジャパン』の中で次のように答えている。

村上に特異な点があるとすれば（中略）よりあっけらかんと、デビュー作を日本人が書いたアメリカ文学（のようなもの）として提示することだった。現在では伝記的事実もあり神戸を舞台とした小説であることはよく知られているが、英語に訳してしまえば、ある意味、舞台が日本であるかどうか分からないというのが、このデビュー作の特徴である。そして、これこそがグローバル化の文学である。（13）

そして更に続けて：

² 詳細は文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成27年度報告書参照

³ グローバル化の文脈で語る際はムラカミとカタカナ表記とする。

たとえば、『風の歌を聴け』は、生と死についてのある種の青春小説だとしても、それは同時に、日本を舞台にグローバル・ポプラー・カルチャーとしての青春小説を書くことは可能かという試みである。その意味において、『風の歌』の時点において、村上の主題はグローバル化（とわれわれが現在呼ぶもの）だったのだと言っても良いだろう。（16）

三浦氏がここで言及している「グローバル化」が世界のムラカミという現象の中でどのように捉えられるかを次のセクションで概観する。

世界のムラカミ

国際交流基金はムラカミ人気を受けて『世界は村上春樹をどう読むか』（文芸春秋社）という企画と出版を柴田元幸、沼野充義、藤井省三、四方田犬彦の協働・共編で行った。2006年3月に開催された「国際シンポジウム&ワークショップ 春樹をめぐる冒険——世界は村上文学をどう読むか」を基にまとめられた。列席者は主に、世界中のムラカミ翻訳者、17カ国23人にも及んだ。その中で「村上春樹 翻訳世界地図」（20-21ページ掲載）なるものを見ると、その人気の高さに目を奪われる。翻訳カバーされていないのはアフリカ地域のみである。しかし、この事実には別の問題が潜んでいる。つまり、アフリカのほとんどの国が、モーリシャスを含め英語圏またはフランス語圏の国に植民支配されていたという事実と、またその名残が現存するという現実である。

Newsweek、Web版のインタビュー記事に「村上春樹の作品が世界中で人気を博していることはよく知られている。アメリカやイギリス、フランス、ドイツ……それにアジアや南米の国々まで。世界の40を超える言語に翻訳されているのだ。毎年のようにノーベル賞候補に挙げられる村上は、間違いなく現代を代表する世界的作家だろう」とあるように、その人気は、ヨーロッパのほぼ中心に位置し、美しい都プラハを擁するチェコでも変わらない。人口約1000万人の中欧の小国だが、フランツ・カフカ、カレル・チャペック、ミラン・クンデラなどの偉大な作家を輩出してきた国である。ムラカミは2006年に、栄誉あるフランツ・カフカ賞を受賞している。チェコでの人気は、文学大国としての土台あってのことだろうが、国境を超えるムラカミ人気の一例でもある。『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』のチェコ語版を刊行し、サントリー文化財団主催のシンポジウム講演者として来日したチェコ語翻訳者のトマーシュ・ユルコヴィッチの言葉も掲載されている。彼はムラカミ人気について次のように語っている。

チェコには私を含めて村上作品の翻訳者が2人いるが、その作品はすでに多くがチェコ語に翻訳されており、村上春樹を知らないチェコ人はほとんどいない。しかし、それはつい最近のことで、私が大学生だった2000年頃は誰も知らない無名の作

家だった。

またムラカミの世界人気については、

よく言われることだが、まずはその文体・文章の易しさがあると思う。一般的に海外文学は文化背景の違いから、そのまま翻訳しても意味も文脈も通じないことがあるが、村上作品は逐語訳でほとんど問題がない。…

村上の作品は文法的に曖昧なことが少ないため、翻訳中に文脈がつかめないことがほとんどない。

これはチェコ語に限らず、どの言語で訳しても同じことが言えると思う。村上自身が意識しているのだと思うが、積極的にわかりやすい文章にしているのではないか。

そしてムラカミ作品は日本文学といえるかどうかについては、

チェコの読者からよくある反応が、「これは本当に日本の作品なのか?」「日本文化の要素がまったくない」というものだ。川端康成や三島由紀夫の作品のような、いわゆる伝統的な日本が描かれている作品を期待している読者は、少しがっかりするかもしれない。私自身は日本的な要素が描かれている、立派な日本文学だと思っている。

ただし、彼自身については日本の作家というよりも、自分で新しいスタイルを作り、強いインパクトを与えて世界で通用している、世界的な作家だと言える。

日本の読者が感じる心地よい読みやすさは、おそらく彼が指摘するようにムラカミ本人が英語をはじめ各言語に翻訳されることを想定して書いているからだろう。

東アジアにおける、村上春樹は、ただ人気があり大勢の読者がいるというだけではなく、まさに文化現象といえるほどである。その中でも、筆者が直接かかわりのある台湾と韓国についてその一例を述べる。まず台湾であるが、2014年に淡江大学に村上春樹研究センターが設立され、「海邊のカフカ」（「海辺のカフカ」）「挪威森林」（「ノルウェイの森」）というカフェも存在する。何より、村上春樹に影響を受けた小説も多く生み出されている。そのような背景は、垂水千恵「邱妙津（きょうみょうしん）作品における「鱧」（わに）という表象の源泉をめぐって：台湾現代文学における日本文学の「引用」」（2012、横浜国立大学留学生センター教育研究論集）に詳細が分析論じられている。

韓国の場合、その長い日本文化は発禁の時代を経て、日本文学ブームのきっかけとなったのが『ノルウェイの森』である。村上春樹全体というよりも、『ノルウェイの森』という作品自体が台湾や韓国の文化生産に影響を与えているともいえる。

“Firefly” in Mauritius: モーリシャスのムラカミ

『蛍』（Firefly）という作品をモーリシャス大学の学生とのワークショップ教材として選択したのは、いわゆる『蛍』論が少ないからである。人気作品、ある程度知名度のある作品は今回初めてムラカミ作品を読むことになる学生たちにも評価が先行する可能性がある。当然『ノルウェイの森』との関連や連続性を知らないことが前提であるが、ムラカミ人気を加速された作品の種となった短編を読むことで、これからのモーリシャスでのムラカミ需要の可能性を予測できるのではないかとも考えたからである。本稿ではその一部の紹介にとどめる。

短編『蛍』は、後に『ノルウェイの森』にほぼそっくりそのまま組み込まれることになる。『中央公論』に1983年1月掲載、翌1984年出版の新潮社短編集『蛍・納屋を焼く・その他の短編』に再収録されている。その後同社から文庫としても再出版されている。そのタイトルからも推し量ることができるように「時間、死、性、恋愛、沈黙、消滅、闇」といったテーマで語られてきた。舞台は文京区の学生寮、言及される地名は、四ッ谷駅、飯田橋、神保町、御茶ノ水、本郷、駒込、新宿、京都である。登場人物は、僕、寮長、学生服の男、同居人、彼女、高校時代の友人、終始彼らの名前があかさされることはない。

物語は「僕」が14、15年前の20歳前の頃を回想場面から始まる。東京の大学に進学した僕は、正体不明の財団が経営する学生寮に住む。同居人は、地図マニアである。ある日、自殺した高校時代の友人の恋人だった彼女と偶然で会う。目的地もないまま果てしない徒歩デートを繰り返し、時間を共有する。彼女の20歳の誕生日に泣き止まない彼女を慰めるために僕は彼女と関係を持つ。その後彼女は京都の療養所に入所すると言う知らせとともに僕の前から姿を消す。やり場のない悲しみとともに同居人がインスタントコーヒーの瓶に入った蛍をくれる。その光は行き場のない魂のように闇の中をさまよう。

モーリシャス大学の学生たちには以下のアンケートを事前に配布し、英語版『蛍』を読みこんだ上でワークショップに出席してもらった。

Participant Information Sheet

I would like to invite you to take part in my preliminary research on Japanese Contemporary Literatures in Mauritius.

Title of Project: A Reading of Murakami's Short Story, *Firefly*, in Mauritius

The purpose of the study: Murakami has been translated into many languages and read widely in the world, and he is, of course, one of the most popular writers in Japan. In his interview, he has shared his standing point as the followings: I would like to write about Japan and pursue the Japanese identity. My first reading

of Murakami was one of his short stories; even though its stage is set in Japan, I did not feel any Japan-ness or Japanese-ness in his writing.

We Japanese often ask “do you like Murakami or not? I would like to ask the same question: do you LIKE Murakami or not? Why? Why not? In your class you have read his latest novel. This time I would like you to read a short story, *Firefly*, which has been evolved and expanded into *Norwegian Woods*. The novel started Asian Countries, starting from Taiwan, on his popularity. In Asian Countries, especially in Taiwan, Korea and China, Murakami is not just a writer but he is CULTURE itself. There is even a phrase, “great/extreme Murakami” and there are cafes named after his novels. Why do you think he is accepted in those countries even though they are politically against Japan. My current paper investigates a special meaning represented by “firefly”:

1. Do you like Murakami or not? Why? Why not?
2. Why do you think he is accepted especially in Asian countries?
3. What led the narrator’s friend to death?
4. What will be happening to a girl suddenly disappeared.

My research aims to understand how you feel/read Murakami without any theoretical reference. The research may be used for journal articles and conference presentations as well as the lectures and seminars I am in charge of. You have been invited because you have studied Murakami.

Protecting your data and identity: Your response to the following questions will be handled with utmost confidentiality. Please note that if your data is used, it will not identify you in any way or by any means.

The most memorable stories of this collection stand at the two poles of Murakami’s talents. “Firefly” is a love story, or a story of love that isn’t. This heartbreaker, played more or less straight, will grace anthologies, and it deserves the pages.

“Hotaru” (“Firefly”) is typical of Murakami -- a story that leads on to an indistinguishable end. The story tells of a juvenile romance between two who grieve over the suicide of their friend and lover. At the close of the story, the girl has left to convalesce in a country sanatorium, while the boy climbs the water tower and lets free a firefly that another boarder had caught for them. The symbolism, the triste, the meandering of inner feelings, all engulf the reader with such intensity that you feel lost, worn, spent after just these 40 odd pages.

それぞれの質問事項に対して学生たちがアンケートに記載したキーワードとその特徴を挙げてみると以下のようなになる。

Q1:ムラカミ作品は好きになれそうか？それはどのような点か？

Complexity in Simplicity,; simple English encourages one to focus on the content

Mundane life experiences; everydayness, recurrent themes

A very post-modernist way of writing

Imagination, mysteries but still realities

An idiosyncratic approach with subtle and multiple layers

Open the readers' own way of interpretation

学生たちの回答で特徴的なのは、チェコの翻訳家も言及しているシンプルな表現を挙げていることである。淡々とした表現の中にこそ日々の複雑に重ねられる経験が読者にゆだねられる形で描かれていることが確認されている。

Q2:アジアにおいて村上が文化現象にまでなっている理由は？

Western culture way of looking and analyzing things, unity,

Everyday life situations,

A large extent the notion of oneness and universality

Standing against the WWII aggression

ここではムラカミの普遍性、グローバル作家としてのムラカミの特徴を挙げているといえる。

Q3: fireflyの役割は？

A sort of hope in the life of the narrator; a new path of light

Symbolizes the ephemerality of life,

The girl, leaving a temporary trail behind; Man is helpless in front of love

The symbol of the end→the end of their relationship

The luck of realism

As a mentor, there is no light without darkness

大学生らしい解釈もある一方で、蛍の持つシンボル性も確実に理解している。⁴

Q4:友人の自殺の理由は？

Hiding a great pain, issues, problems, unknown darkness

Rather ponder on death and its definition

Desire for freedom; fail to grasp realities

⁴ モーリシャスでも蛍の生息は確認されている。

out of cowardice and weakness
The eternal triangle?

Q5:ガールフレンドの今後は？

Move on her life; go her own way; find her way out

The will to live; the essence of life;

Positive or Negative end.

Stay in a static timeframe

Just like a firefly, she will undergo her struggle to live on

主人公の友人の死と恋人の今後に関する設問には、世界の若者たちに共通する深層心理を読み取っているといえよう。

結

本稿は、21世紀に生きる私たちが、生産性重視から、個人の「アイデンティティーを管理・維持して自己実現を図る」というより高きを目指す「究極の価値」へと移行する新自由主義へ向かうプロセスの可視化に果敢に挑んだ故・三浦氏の遺作からヒントを得、筆者が関わっている地域との比較読者論への導入を試みたものである。

このワークショップの試みの後、モーリシャス大学ではムラカミの『色彩をもたない多崎つくと、彼の巡礼の年』をテキストとしてModuleが組まれている。モーリシャスの書店にはムラカミ作品の英語翻訳とフランス語翻訳が並び、どちらも人気であるという。今後翻訳地図にモーリシャスの母語であるモーリシャス・クレオール語での翻訳が記されることになるかもしれない⁵。

故三浦氏が目指したもの、ムラカミが目指すものは、過去の歴史や経験にもとづく今現在の試みによって得られる究極の自己実現であり、それこそが人として持続的に成長し続ける新自由主義であるといえるかもしれない。彼らの目指すものがモーリシャスでどのように展開してゆくかを今後の調査課題としたい。

*本稿は、2015年11月に開催された日本アメリカ文学会中部支部例会（於中京大学）で行った口頭発表の原稿加筆修正を施したものである。アジアの村上に関しては、大妻女子大学の赤松美和子氏にご教示頂いた。また情報を提供してくれたモーリシャス・台湾・韓国の友人たちに感謝申し上げる。

⁵ 筆者は韓国外国語大学主催の国際学会にて“A Role of Dev Virahsawmy in Establishing the Mauritian Mother Tongue, Literature and Education”の発表を行ったが、Virahsawmyは西洋の作家、シェークスピアをはじめ多くの作品をモーリシャス・クレオール語に翻訳している。

参考文献

- 王海藍著『村上春樹と中国』東京：アーツアンドクラフツ, 2012
- 柴田元幸〔ほか〕編『世界は村上春樹をどう読むか』東京：文藝春秋, 2006
- 蕭幸君（しょうこうくん）、「『螢』、明滅する生への希求」『世界文化としての村上春樹』（2015）
- 藤井省三編『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』（Murakami Haruki study books；12）東京：若草書房, 2009.6.
- 藤井省三著『村上春樹のなかの中国』（朝日選書；826）東京：朝日新聞社, 2007.7.－
- 三浦玲一『村上春樹とポストモダン・ジャパン グローバル化の文化と文学』彩流社
2014

